

「肝心闇話」

校訓：自主 責任 奉仕 協力

(文責：校長)

よく学び、共に生きる生徒 ①正しく考える ②愛する ③尊ぶ

確かな学力 思いやりの心・たくましい体 豊かな人間性 主体的な生活設計 郷土を愛し、郷土に活ける力

□□オアシス

「おはようございます。」「ありがとうございます。」「しあわせだなあ。」「すみません。」

働き方改革も大切ですが・・・

生徒たちに教師の仕事は「素晴らしい」と語ろう！

委員会の提案する業務改善の具体策は、例えば、KIIFの導入、通知表の所見廃止、部活動の朝練禁止、職員会議の回数制限、暑中見舞いの禁止、地域行事や校区内巡視の削減など、どれも劇的な改善策ではありません。職員の多忙化を根本的に解決するには、教員数の増加や1クラスの生徒の定数削減が不可欠だと思います。

さて、勤務時間について、一昨年文科省より出されたガイドラインによると、①1ヵ月の超勤45時間以内、②1年間の超勤360時間以内（月平均30時間）という基準が出されました。（本校は先月は全員45時間以内でした！）

うつ病等、精神的な疾患による休職者は増加の一方で、超勤をなくすことが解決の最大方策だと言われていますが、労働時間を減らせば、仕事のストレスがなくなり、生産性が上がり、いい教育ができるのでしょうか？私はそうは思いません。「働き方改革」は「時短」だけで解決する問題ではないと考えます。

たとえば、【道程】「僕の前に道はない、僕の後ろに道はある」で有名な高村光太郎は、詩人であり、歌人でもありました。彫刻家や画家としても名を残しており、1日15時間は制作に励んでいたそうです。漫画家の手塚治虫も3日間徹夜ということも多かったといわれていますが、彼らが「働き過ぎ」でストレスを溜めていたとは思えません。

仕事は勤務時間よりも、どんな姿で働いているか、夢中になって取り組んでいるか、充実感を感じているかというようなことの方が大切だと思います。夢中になっている人は決して愚痴や不満なんて言いません。キラキラ輝いて仕事をしている教師の姿を見て、生徒たちは先生という仕事にあこがれ、尊敬の念を持って接してくれるようになるのではないでしょうか。

愉快に働く法十力条

日本の製紙王、藤原銀次郎氏の著書「事業学・人間学」に、この十力条が記されています。昭和13年、彼が69歳の時に書いた本ですが、現代にも通用する内容もあると思うので、紹介しましょう。

第1条「仕事は自分のものにせよ。」

第2条「仕事を自分の学問にせよ。」

第3条「仕事を自分の趣味にせよ。」

第4条「卒業証書はないものと思え。」

第5条「月給の額を忘れよ。」

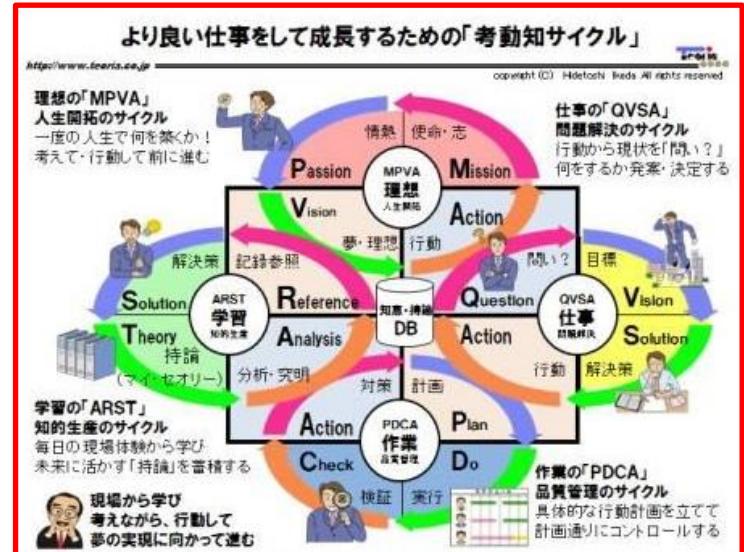
第6条「仕事に使われて、人に使われるな。」

第7条「ときどき大息を抜け。」

第8条「先輩の言行に学べ。」

第9条「新しい発明、発見に努めよ。」

第10条「仕事の報酬は仕事である。」



「教育観」を変えてくれた国 *New Zealand*

ニュージーランドの新しい国旗

神戸市は、シアトル、マルセイユ、リオ・デ・ジャネイロ、天津、リガ、ブリスベン、バルセロナ、仁川と姉妹・友好都市契約を結んでおり、フィラデルフィア、大邱とは親善協力都市契約を結んでいます。今は残念なことに殆どなくなってしまったのですが、これまで、教員も海外に派遣されることがよくありました。(天津市ではバレーボールの友好試合ならぬ有攻試合(全中国選手が出ていて一方的に攻撃され、イジメとも思われる試合)をさせられました。)



平成 14 年の秋、私は約 2 週間、文科省の派遣でニュージーランドへ行かせていただきました。関西空港から飛行機に乗ること 11 時間 30 分。帆の街オークランドに着きました。更に国内線に乗り換え、首都ウェリントンで 2 泊、そこからバスに 5 時間乗ってネーピアという町で 8 泊、そして再びオークランドに戻って 4 泊しました。

ニュージーランド航空のパンフに、「人生観の変わる国、100%PURE ニュージーランド」とありました。なんと過大な表現だと思っていましたが、ニュージーランドのクリーンさ、安全さ、美しい自然、そして、とても親しみのある人々と接するなかで、決して嘘ではないと思うようになりました。しかし、それ以上に、私にとっては、ニュージーランドは「教育観」を変えてくれた国でした。

ネーピアでは、たくさんの学校を訪問しました。子どもたちは、いずれも、先生の話を素直に聞き、意欲的・創造的に、大変落ち着いた雰囲気で学習に取り組んでいました。ニュージーランドでは、1989 年に大きな教育改革が行われ、幼児期から学校・地域・家庭のそれぞれの中で、一人ひとりを大切にした教育活動が意図的・計画的に行われています。クラスの人数は 27,8 人。更にアシスタントティーチャーやヘルパーがいて、内容ごとに分かれて先生のもとに集まって座り、一人ひとりに声をかけて授業が行われていました。日本の学校は 1 クラス 40 人だというと、子どもたちは「信じられない」とびっくりした声をあげていました。広い芝のグラントやゆったりと設計された校舎等の恵まれた教育施設の中で、幼い頃から先住民マオリ族との共生を自然に身につけて育った子どもたちの中には、「いじめ」という言葉もありませんでした。

また、ニュージーランドの出生率は先進国で最も多い 2.1 人だそうです。土・日曜日になると、家族連れで仲良く歩いている姿をよく見かけました。「キューイ・ハズバンド」といわれるよう、女性上位の国ニュージーランドでは夫の家事分担も多く、子どもたちは、「家庭にいる時間が一番楽しい。」と言います。

研修の最終日、6 つの学校訪問を終えて、ネーピアの町を海から見渡せるキッズナッパーズ岬を訪れました。エメラルドグリーンに輝く海、広い水平線、人を恐れず雄大に空を舞うシーガル、つがいで仲良く巣作りに励むカツオドリの群れ、長い年月を感じさせる巨大な地層群、そして牧草をのどかに食べている羊たちの群れを眺めていると、ニュージーランドの教育の根底にあるものが少しあわかったような気がしました。

この研修で、学校・地域・家庭のそれぞれが役割を分担し、一人ひとりの子どもを宝物のように愛し、育んでいるニュージーランドの人たちの姿に感動させられました。ニュージーランドは、私にとって、まさしく教育観を変えてくれた国でした。

ところで、ニュージーランドでは留学生の受け入れに力を入れています。同じ海外に行くなら、ニュージーランド留学はいかがでしょうか。私がもう一度、学生時代に戻れるなら、迷わず行くだろうと思います。

E Ihowa Atua. O nga iwi matou ra Ata whakarongona; Me aroha noa Kia hua ko te pai; Kia tau to atawhai; Manaakitia mai Aotearoa (オーストラリア国歌：マオリ語)

日記の日

1942 年の今日 6 月 14 日、ユダヤ人の少女アンネ・フランクが日記を書き始めたことから、今日は日記の日だそうです。最近、「人生は習慣できている！なぜかうまくいく人の秘密の習慣」という本から、エクセルで作る『夢をかなえる朝日記』というのを教えてもらいました。夜日記よりはるかにすごい効果があるそうです！